発表概要

小学校統廃合によって生じる児童・地域の変化
――対馬市阿連小を事例として

落合 志保

1. はじめに

本稿では、小学校の統廃合によって生じる児童・地域の変化を、対馬市立阿連小学校の校長、児童へのヒアリングをもとに報告する。まず、学校の統廃合についての背景や先行研究を概観し、具体的事例として阿連小学校の概要や歴史、ヒアリングによる調査内容について述べた上で、学校の統廃合という問題について考察を行う。

なお本稿は、2016 年夏に行われた立教大学の研究プロジェクトによる第 1 回対馬アクション・リサーチでの現地調査と関係者へのヒアリング（本報告書 pp.41-73）をもとに、同年 12 月の対馬学フォーラムで発表した内容に加筆、修正を加えたものである。

2. 統廃合の背景と評価

近年、少子化の影響で、日本各地で小学校や中学校の統廃合が行われている。この背景には、「学校統廃合について考える？地域住民の立場から学校統廃合問題を考えるサイト」によると、少子化を理由とした学校経費の合理化・教育予算の削減の動きがあるという（徳島県吉川市住民 2015）。

次に、統廃合が行われた学校の当事者（児童・保護者）はアンケートでどのような評価をしているのかみていきたい。

小中学校及び、生徒・児童・保護者への結果では、学校が統合したことへの評価について約 6 割が肯定的に答えていた。統合してよかった点としては、「友達がたくさんできる」と答えたのが約 5 割で、「クラス替えができる」、「行事やクラブ活動に活気」と答えたのは約 10%だった。統合して困った点について、「通学距離が遠くなった」と答えた人が約 22%、「友達の家が遠い」、「少人数のほうが指導が細かい」と答えた人は約 10%だった。

2014 年には、中央教育審議会が都道府県・市町村の教育委員会を対象とした「学校規模の適正化及び少子化に対応した学校教育の充実策に関する実態調査」を行っている。この調査で注目したいのは、「（統廃合の前後で）いじめが減少したか」という項目について、約 7 割の教育委員会が「どちらかというと当てはまらない」・「当てはまらない」と回答していたことである（中央教育審議会 2014）。質問が「減少したか」という聞き方ではあるが、これが「増加・変わらない・減少」という聞き方だと、増加している可能性が高いのではないかと考える。

以上の調査はアンケート結果の数字で児童や生徒、保護者の意向を大まかに把握するものでる。それに対して、児童や保護者、地域住民の質的なデータが不十分に思える。数字

からはわからない現場の声をきく必要があると考えた。今回は、小学校の統廃合によって、児童や地域住民の変化を、ヒアリングを通してみていきたい。

3. 阿連地区と阿連小学校について

最初に、阿連地区について説明したい。市の調査によると、人口は 250 人（男性 122 人、女性 128 人）、99 世帯である（2016 年 12 月現在）。高齢化率（総人口に対する 65 歳以上人口の割合）は、40～50%といわれている。内閣府の『平成 28 年度高齢社会白書』によると、日本全体の高齢化率の平均は 26.7%であるので、阿連地区の高齢化が進んでいることがわかる。

主な産業は農業、漁業、林業である。かつては、炭鉱もあったという。また、米や仏教は、中国大陸から朝鮮半島へ、そして対馬を経由して日本本島へ伝わったので歴史的に重要な島だった。対馬には、市指定無形文化財のオヒデリ祭、国選択文化財の盆踊りなどさまざまな民俗行事が続いている。

阿連小（地図 1、2）は、1873 年に開校し、多くの卒業生を輩出してきた。1994 年に現在の校舎に改築した。近年は、過疎の影響によって児童数は減り続け、2015 年度は、全児童数が 10 名になったため、2016 年度から金田（かんだ）小学校（以下、金田小）と統合された。学区が広くなったので、金田小までスクールバスが出ることとなった。阿連地区から、金田小までスクールバスで約 20 分かかるという。

地図 1 ：対馬全体から見た阿連小の場所

地図 2：阿連小と金田小の位置

（地図 1、2 出典：Google Map）

4. 調査方法

さて、今回のヒアリングでは、学部生 2 名と筆者、対馬市役所の前田氏で、岡﨑校長を訪ねた。岡﨑校長は、阿連小に 3 年間勤務され、現在、金田小学校の校長を勤めている。そのため、阿連小と金田小の統合による児童と地域の変化を間近でみてきた。以下で、岡﨑校長へのヒアリングをまとめていく。

岡﨑校長は、阿連小勤務時は、小学校の敷地内にあった一戸建ての校長住宅で暮らしていた。岡﨑校長は阿連小のかわいらしい校舎（写真 1,2）を大変気に入っていた。閉校する 2016 年 3 月 31 日。岡﨑校長と職員 1 名は、電気が止まるまで校舎の清掃等を行っていた。最後の施錠し校舎に背を向けた時、声が聞こえたような気がし、後ろ髪をひかれる思いで去ったそうだ。岡﨑校長はその後も、阿連小を朽ちさせたくないという思いから、時折、敷地内の草刈りや校舎清掃、窓の開閉など手入れをしているという。

写真 1：春の阿連小学校（撮影：岡﨑校長）

写真 2：夏の阿連小学校（撮影：学生）

5. 調査結果

5.1. 校長先生の語りから：児童の変化

まず、阿連小を離れてから、金田小へ移ったときの子どもたちの様子についてである。岡﨑校長によると、子どもたちは、閉校式の時はやはりさびしそうにしており、金田小に初めて登校した日は、笑顔の子どもが半分、不安そうにしている子どもが半分だったという。笑顔と不安が半分というのは、金田小に親戚がいる子どもは笑顔であるが、親戚や知り合いがいない子どもは不安そうな顔をしていたということだった。

4 月に、環境や生活リズムの変化に慣れず、月曜日を 2 週続けて休む子どももいたそうで、岡﨑校長は、そのたびに家庭訪問をしていた。子どもの順応は早いもので、5 月には元気になり、保護者も安心されたそうだ。

その後、岡﨑校長は、金田小の子どもたちが持っている雰囲気と、阿連小の子どもたちが持っている雰囲気に、若干の違いを感じたという。阿連小の子どもは、普段、素直で明るくて、朗らかで、やる気に満ちているところがあった。そういった阿連小の雰囲気が金田小に持ち込まれたことにより、金田小の子どもたちもよい影響を受けて、活気のある学校に変わってきているのではないかという。とくに、金田小には 6 年生が男の子 1 人しかいなかった状況で、阿連小から 3 人の 6 年生が来たことを、子どもたちは非常に喜んだそ

うだ。

阿連小の子どもたちは、学校での自分の居場所をつくりだせるようになり、それぞれの新しい役割を担いながら学校生活を送っている。阿連小の子どもたちは、全校児童 10 人くらいで何年も過ごしているので、それぞれの役割が決まっていた。しかし、金田小と統合することで、子どもの数が増え、自分にできること、ほかの子にはできないことを知ったことにより、自己肯定感が更に高まった。子どもたちにとっては、人数が増えたことで切磋琢磨できる場所が形成されたのだった。

子どもたちは新しい学校に慣れつつあるが、岡﨑校長によれば、阿連の学校は、子どもたちにとって心の拠り所のひとつであるという。6 月のある日、阿連出身の 4 年生の男の子から「校長先生、鍵ってまだありますか？」と話しかけられた。岡﨑校長は、阿連小の鍵をまだ預かっているので「持っとるよ」と答えると、男子児童は「いつか学校に入れてください」と言ったという。このことから岡﨑校長は、子どもは阿連小のこと忘れておらず、阿連小の校舎に入ると落ち着くのではないかという。

5.2. 地域学習について

次に、地域学習について教えていただいた。

阿連小では、総合の学習だけではなく、社会科、理科、生活科でも、地域にある川に行って学習したり、お年寄りからお話を聞いたり、様々な取り組みを行ってきた。阿連地区内は徒歩で移動ができるので、普段からそのような学習をしており、岡﨑校長は非常によかったと思っていたそうだ。地域学習では、阿連地区に伝わる盆踊りを練習しており、閉校式でも踊ったという。

写真 3：全校児童による阿連の盆踊り（平成 27 年度学習発表会）（撮影：岡﨑校長）

阿連地区の盆踊りは長い伝統があり、それが地域の人びとにとっては一つの誇りになっている。子どもたちが少なくなって盆踊りの継承ができないのではないかと言われていたため、小学校で地域学習に取り組んでいたそうだ。子どもたちは地域の人びとから教わることで、踊れるようになった。2015 年の学習発表会では、阿連地区の雷鳴（らいめい）神社という古い神社の歴史を 4、5 年生が劇にしたそうだ。このように、子どもたちが地域の

方から地域の文化や伝統を学び、それらを発表することで、地域の人びとは地域のよさを再認識することができる。

岡﨑校長は、阿連地区には一つの集落に、一つの学校だけだったことから、地域とのつながりがとても強かったという。人生の大先輩たちが、学校に来て知恵や伝統文化を教えてくれるので、小学校は、文化交流の中核だった。地域全体で子どもを守り、育てていくという、現在では少なくなった教育の在り方が阿連地区に存在していた。

金田小で行われている地域学習は、近くの川にウナギがのぼってくるので、川中心の学習になる。金田小の校区は広く、また近くの集落まで徒歩で 20 分程度かかるので、ウナギ以外の題材については、現地での学習が難しいといわれていた。

地域の変化については、子どもたちがスクールバスで、朝、阿連地区から出ていき、夕方帰ってくるだけになってしまったので、子どもたちの声をきくこと、子どもたちの姿を見る機会が減った。そのため、地域全体がさびしい雰囲気になったという。このことから岡﨑校長は、改めて子どもたちの持つエネルギーを実感したそうだ。

5.3. 児童の語りから

児童に地域学習で地域の方と交流がなくなってしまうことについて質問したところ「さびしい」と答える子と「さびしくない」と答える子がいた。阿連地区の自慢は何かという質問には「昔からの文化が続いているところ」と答えていた。

話していくうちに「亥の子」という対馬の各地区に伝わる豊穣の祈りの歌があることがわかった。この「亥の子」は総合学習の時間で、年長の児童が年少の児童へ口承で伝えていた。しかし、金田小には「亥の子」の文化がないため、阿連小の児童は「亥の子」の話題を出すことができなくなったという。それは、ある子によれば「説明しなければならないので口に出さない」という。おそらく、児童にとって説明するのが煩わしいのだろう。

金田小と阿連小を比べていいところや違いはあるかという質問に対して、「神田小は人数が多いからかもしれないですけど、なんか皆違う」、「阿連小はすごく厳しかったけど、金田小はゆるい！」という児童の雰囲気の違いや先生の指導の違いを指摘していた。

阿連小が閉校してしまうと聞いた時の気持ちを聞くと、「なんかいやだった」、「他の学校来るときは、悲しいっちゃ悲しい」と答えていた。

また、金田小でも地域学習をしたいかという質問に対しては「(地域学習を行いたいと)思う」「(阿連の文化を）ほかの地域に知られたくない」「金田小のことを知っても、自分の地域じゃないから（仕方がない)」「金田小のことは金田小の先生に、阿連小のことは阿連小の人（先生に）に（教わりたい)」と様々な答えが返ってきた。

最後に、阿連小がもし復活するとしたら復活してほしいか質問した。もちろん、児童は「復活してほしい」と声をそろえたが、続けて、「人数を少し増やしてほしい」「人数（は）そのまま（統合後の人数）で校舎をこっちに移してほしい」「人数増やさんでいい」と、人数に関してはそれぞれの希望があった。

6. まとめ

小学校は児童と地域の人びとを総合学習の時間によってつなげる場であった。また、そ

の地域の文化や伝統を存続させ地域そのものを見えるようにしていた。

つまり、小学校がなくなるということは、地域の活気が減ること、文化交流の場が失われることを意味する。そもそも、地域の文化や誇りというのは、年長者から教わり、下の世代へ教え、そして、その文化を改めて見直すことで、存続されていく。阿連地区では、文化を守るために小学校に代わる「文化交流の中枢」を築くことが必要となる。地域の人びとや児童は、自分が住む阿連でどのような交流をしたいのか、どのように伝統を守りたいのかを考え、見直すことも必要となるだろう。

7. 対馬学フォーラム感想

2016 年 12 月に対馬学フォーラムが開催された。そこでは、小学生らも地域学習の成果を発表していた。佐須奈小学校の児童らは、ツシマヤマネコとイリオモテヤマネコを調べ、比較研究についての発表をした。彼らはツシマヤマネコとイリオモテヤマネコの違いが分かるように自作のコスチュームを用意し、それを着て現れた。彼らがヤマネコを演じる様子を見て、会場は終始ほのぼのとした雰囲気に包まれた。最後に、彼らは島唄の替え歌を歌った。対馬の自然とツシマヤマネコについての歌は、会場を感動させた。夏に対馬に訪れたときも思ったが、報告者は、対馬の子どもたちは発表する場を与えられるとそれに向かって一生懸命に取り組み、堂々と発表する力があると思った。彼らがどんな成長を遂げていくのかとても楽しみである。

【参考文献】

中央教育審議会，2015「学校規模の適正化及び少子化に対応した 学校教育の充実策に関する実態調査について」.

文部科学省，2007「（15）学校規模の最適化に関する調査」.

徳島県吉野川市住民，2015「学校統廃合の真のねらい」，学校統廃合について考える？地域住民の立場から学校統廃合問題を考えるサイト（2017 年 2 月 15 日取得 http://www.kantendokoro.com/entry11.html ）.

（おちあい・しほ　立教大学大学院社会学研究科博士課程前期課程）

小学校統廃合による児童、地域住民への影響
―対馬市阿連小を事例として

立教大学大学院社会学研究科
社会学専攻前期課程1年

発表者：落合志保

共同研究者：遠藤みどり、加藤美帆、丸山由希子、望月玖瑠実、山口恭平

引率・指導：阿部治先生

はじめに①

「立教大学ESD研究所（所長:阿部治）と長崎県対馬市（市長:比田勝尚喜）は、2016年6月7日（火）、池袋キャンパスにて、ESD（Education for Sustainable Development:持続可能な開発のための教育）の実証研究を通じ、地域創生、またその地域創生を担う人材育成に寄与することを目的として、ESD研究連携に関する覚書を締結しました。」（立教大学HPより引用）

第1回対馬アクションリサーチ合宿（2016.8.8～8.12）

目的：第一段階として、現地踏査や関係者ヒアリングを通じ、対馬における地域づくりの現状・課題を整理し、次年度以降のESDモデル実証事業の立案につなげる。

はじめに②

- なぜ統廃合するのか

→小規模校は、経費が割高になってしまうので、統廃合して学校経費を合理化するため

- ①国の調査（平成19年度）

→学校統合の現状及び効果等の把握

→一定規模の集団形成による様々なメリットから、保護者・子どもの6割以上は肯定的な評価をしている。（否定的な評価は12%）

- ②国の調査（平成27年）

→学校規模の適正化（12~18学級）及び少子化に対応した学校教育の充実策に関する実態調査について

→注目：いじめは減少したか？

→当てはまる　31%

→当てはまらない　69%

- 以上の調査において、児童や地域住民の質的なデータはない。

→数字からはわからない現場の声を聞く必要性がある

→今回は、そのような変化をヒアリングを通して明らかにする。

1、阿連（あれ）地区、阿連小学校について

◎対馬市厳原町阿連

- 人口：100世帯、

男性131人、女性131人(h.28.10月現在)

- 高齢化率（65歳以上の人の割合）：40~50%
- 産業：農業、漁業、林業
- かつては炭鉱あり

◎阿連小学校

- 1873年開校
- 昨年度は全児童数が10名

→今年度から金田小へ

2.元阿連小学校校長先生へのインタビュー

- 2016.8.8
- 場所:対馬市立金田(かんだ)小学校校長室
- 対象者:岡崎校長先生（元阿連小学校・現金田小学校校長先生）
- 聞き手:前田剛氏（対馬市職員）、落合志保・山口恭平・遠藤みどり（立教大学部3年生）

2.統廃合によってどのような変化があるのか

①子どもたちの様子（校長先生のヒアリングから）

→閉校時：さびしさ

金田小へ:笑顔半分、不安半分

→親戚が金田小にいる子は笑顔

→2週間続けて月曜日休む女子児童もいたが、すぐ順応した

→統合したことによって人数が増え、活気づく

→居場所づくり、新しい役割の認識＝社会性

→6月に子どもが「阿連小にいつか入れてください」

＝阿連小を忘れていない

②地域教育について（校長先生のヒアリングから）

- 阿連小では総合学習の時間だけでなく、生活科、社会科、理科の授業で、地域に出かけて、おじいさんおばあさんに話を聞いていた
- 阿連小では学習発表会があった

Ex)伝統的な盆踊り、雷鳴神社の劇

→阿連小は、金田小と統合したため阿連地域だけを学ぶことは難しい。

③小学校の意義（校長先生のヒアリングから）

- 文化交流の中枢

→子どもたちの地域学習（伝統的な盆踊り、キュウリの作付け、そば打ちなど）のために地域の人が協力してくれる場所

- 地域の人と子どもたちをつなぐ場所

→運動会や学習発表会：他地域からの親戚や地域の人が見に来てくれる

④地域の様子（校長先生のヒアリングから）

- 小鹿での統廃合の時には…

→「小鹿のじいちゃん、ばあちゃんが言ったのは、子どもたちは朝バスで学校へ行って、夕方帰ってくるだけ。子どもの姿が居ない、声が聞こえない、寂しい、地域全体が寂しい雰囲気になってしまった。阿連もそう感じますね。」

- 「地域はもともと寂しくなりますよ。活気がなくなるというますかね。子どもたちのエネルギーはね、すごいなと思いましたね」

元・阿連小児童へのインタビュー（6人くらい）

- 統合したため、阿連だけの地域学習ができなくなり、阿連の人々に会う機会が減る

→寂しいと思う子もいる

- 阿連小での地域学習について

→盆踊り、お日照り様の劇（雷鳴神社）、しめ縄づくり

→阿連の自慢：昔からの文化が続いていること

→亥の子（44:43~）

→金田小では亥の子をやっていないので、教えられない

- 金田の文化について

→教わりたい、そうでもない

→「金田小のことを知っても自分の地域ではないから…」

→他の地域に知られたくない

結果まとめ

- 小学校が統廃合すると

→子どもたちは不安を抱えつつも、社交性を身に着けることができる

→地域では、子どもを見かけることが減り、寂しさに包まれる

→文化交流の中枢の場が失われる

考察

文化交流の中枢の場が失われる

→伝統芸能は地域の歴史や誇りが詰まっているが、それが伝承できなくなる可能性が高まった

→また、学習発表会という子どもたちの発表を、地域の人が聞くことで、地域の良さを改めて感じられる機会がなくなった

今後の課題

- 阿連で必要なのは、新しい「文化交流の中枢」の場を築くこと

→阿連に住む人、全員で、阿連の文化をどのように残していくのか考える機会に繋がるのではないか

ヒアリングと阿連小を訪ねた感想①

- 対馬と東京の郊外の小学校の違いに驚く

→発表者は郊外に育ち、そこは団地が多く、1クラス25～30人で、全校生徒は約300人だった。阿連小が10人とは確かに寂しい。

→地域学習は少なく、運動会では地域と関係のない舞踊を行う

→住民・子どもは多いが、学年や住む場所が違うと顔見知りは少ない

→子どもがいない世帯にとって小学校とのかかわりはほぼない

ヒアリングと阿連小を訪ねた感想②

- 子どもたちが自分の住んでいる地域や文化に誇りを持っていることの重要性

→発表者の住んでいる地域も歴史はあるはずだが、近代のことしか学ばない？伝統文化がないので、誇りを持てない

→自分が生まれ育った場所・文化を知り、誇りと思うことで自己肯定感が生まれるのでは？

- 子どもたちを素直に育てる阿連小の教育とは？

→亥の子をもったいぶらず歌う姿、校長先生が評価する素直さ。先生方はどのように彼らを育て、教えたのだろうか。

ヒアリングと阿連小を訪ねた感想③

- 地域性、子どもたちの意見を尊重した新しい「統廃合」はないのだろうか。

参考文献
・中央教育審議会,平成27年「学校規模の適正化及び少子化に対応した 学校教育の充実策に関する実態調査について」
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2015/01/19/1354538_7.pdf 2016.12.8取得）
・文部科学省,平成19年「(15)学校規模の最適化に関する調査」
（http://www.mof.go.jp/budget/topics/budget_execution_audit/fy2007/sy190706/1907d_15.pdf 2016.12.8取得）